

非国民の烙印～日独混血少女の受虐

前編：強制露出と娼婦教育



濠門長恭

目次

1 : 高慢少女 - 3 -

2 : 母親逮捕 - 37 -

3 : 緊禪一番

4 : 職業教育

5 : 四十八手

6 : 近親肛姦

7 : 父兄参姦

8 : 荒縄教練

後書き

1：高慢少女

「そこの娘、ちょっと来い」

少女は足を止めて、十メートルほど先の交番を見た。若い巡査がこちらを指差している。見知らぬ顔だった。この春に赴任したばかりの新前だろう。

巡査に呼びつけられれば大のおとなでも怯えるものだが――少女は臆することなく大股に歩いて、巡査の前に立った。

「わたしに、なにかご用ですか」

「おまえ、いったいに日本人なのか？」

巡査が真顔で訊ねたのも無理はなかった。

太い眉の下の一重まぶた、ふっくらした頬にはさまれた小ぢんまりした鼻と、下唇の厚いおちよぼ口。造作は大和撫子のそれなのだが――編んで両側に垂らした髪は淡い栗色、肌は抜けるように白く、瞳も青味がかった。

「はい。わたしは、れっきとした少国民です。南国民学校上級科二年生の、中尾栄子といいます」

巡査は、得心のいかない顔で少女を眺めた。

進級したばかりの二年生なら、●四にはなっていないだろう。

そのわりには、少女の胸は当人の手の平に収まりきらないくらいに膨らんでいる。上背もあった。

「敵国人との混血だな。やつら、図体だけではかいからな。どうせ、おまえの母親はラシヤメンか現地妻だろう。日陰者の身で、上級科とは生意気だ。とっとと身売りするなり妾奉公するなり、分に合った生き方をしろ」

物怖じしない態度が気に食わないのか、巡査はことさらに少女を貶めた。

「母は、きちんと籍を入れてもらいました。結婚して中尾峰子になる前の名前は、ミーネ・フォン・シュライバー。世界じゅうでただ一国、日本と同盟を結んで鬼畜米英と戦っ

ている友邦ドイツの良妻賢母です」

外国は敵国。混血児は母親のふしだら。そういった思い込みをくつがえされて、巡査は向かっ腹を立てた。

「この非常時に、チャラチャラした服装をしおって。娘の身なりひとつ躰けられないで、なにが良妻賢母だ。風紀紊乱のかどで、親子ともども逮捕するぞ」

巡査が矛先を転じた。あながち、言いがかりでもない。

制服の決まりはなくても、男子は詰襟学生服か、陸軍第三種軍装そっくりの国民服。女子なら、セーラー服の上衣にモンペがふつうだった。

少女の服装は、ずっと垢抜けている。白いブラウスに黒のスカーフを巻いて、うぐいす色のカーデガンを羽織っていた。下もモンペではなく、膝丈の黒いスカート。太腿の前に縫いつけられたポケットが、実用を兼ねた装飾にもなっていた。

最初にこの格好で街を歩いたときには、国防婦人会の割烹着に取り囲まれて、お説教どころか、服を脱がされそうになった。

少女は、巡査の目を見つめた。

「これは、ブント・ドイッチャー・メーデル。ヒトラー総統の肝煎りで作られた、ドイツ処女同盟団の制服です。簡素で、とても動きやすく出来ています。けっして、華美でも贅沢でもありません」

制服は本物ではない。戦前に母が取り寄せていた雑誌の記憶を思い出しながら、少女が自分で古着を仕立て直したものだだった。

本物であろうとなかろうと。同盟国の元首まで引き合いに出されては、割烹着も紺サージも、おいそれと難癖はつけられない。

とはいえ、権力を笠に着て庶民に威張り散らしている巡査としては、小娘に言い負かされたのでは面目が立たない。現に今も、数人の野次馬が遠巻きにしている。

「議論好きのドイツ人らしく、口だけは達者

だな。おまえの父親も、母親の恥知らずな口説にほだされたのだろうな。それとも、鳩胸出っ尻の野蛮な色香に惑わされたのか。いずれにしても、ろくな男ではないな」

苦し紛れの八つ当たりだったが、結果として巡査は虎の尾を踏んでしまった。

少女は、真っ向から巡査を見据えた。

「父は、名誉の戦死を遂げた海軍大佐です。その父を、お巡りさんが侮辱なさるのですか」

巡査には青天の霹靂だった。最下級の巡査と高等武官とでは、格が違い過ぎる。たとえば、この少女が「父を侮辱された」と訴え出れば、自分の首が危うい。

「出鱈目を言うな。海軍士官が外人女を嫁にするなど、あるわけがない。身分詐称で、今度こそほんとうに逮捕するぞ」

「父は、海軍機関学校三十期の中尾正です。わたしの言葉が嘘かどうか、水交社にでも問い合わせてください」

数秒の沈黙。巡査は、敗北を悟った。水交

社は半官半民の、海軍同窓会の総元締めみたいな組織である。海軍省とは違って、上司の裁可を得ずとも、一介の巡査が中尾正の経歴を問い合わせても差し支えない。そして、その結果は――巡査にも想像がついた。

「すまなかった。言葉が過ぎたようだ」

わずかに顎を引いたのが、謝意のつもりなのだろう。

「今後のこともあるから、詳しく話を聞きたい。交番へはいつてくれ」

一時的に拘束して取り調べた形にすれば、野次馬の手前は取り繕える。

しかし少女は、一步も動かなかった。

「あとで、学校まで一緒に来ていただけますか」

「なにい……？」

巡査に学校へ連れて行かれるなど、不名誉きわまりない。道に迷った新一年生か、平日に盛り場をうろついていた不良生徒。後者なら、先生のビンタと父親の拳骨と自宅謹慎は

覚悟しなければならない。

ことごとく、巡査の思惑を裏切る少女だった。

「ここで時間を取られていては、遅刻します。遅刻の理由を、お巡りさんから先生に説明してください」

「なに、遅刻しそうなのか」

巡査は、野次馬の耳まで届く大声をあげた。「それはいかん。学業をおろそかにしては、自分の不為だけではない。御国への不忠というものだ。もうよいから、学校へ急げ」

「はいっ。中尾栄子、学校へ急ぎます」

少女も。軍事教練さながらに声を張り上げて答えると、ぺこんとお辞儀をしてから、脱兎のごとく駆け出した。のは、十字路を曲がるまで。すぐに少女は歩を緩めた。

五分前の精神を、少女は父親から教わっていた。今日のような突発事があっても五分前に準備万端整っているためには、五分前の五分前。半人前で物事を教わる立場の者は、さ

らにその五分前。

少女は余裕を持って、校門をくぐった。

一面に菜の花が咲いた校庭では、上半身裸の初級科生徒が、外周路に沿って遊んでいる。

半裸になった上級科の男子生徒の姿もちらほら。さすがに女子生徒はいない。

栄子は、二年の女子ばかりが集まっている教室へ向かった。

「おはようございます」

「おはよう様」

「良いお天気ですわね」

挨拶は交わしたが、女子生徒たちのおしゃべりの輪に交ざろうとはしない栄子だった。

予鈴の鳴る少し前に、女子生徒も服を脱ぎ始めた。下着はシュミーズと肌襦袢が半々。乳バンドを着けている者は、栄子のほかに二人だけ。

予鈴が鳴ったときには、全員が国旗掲揚台の前の空き地に集まっている。

教師たちも、生徒と同じ姿で校舎から出てきて、生徒たちに向かい合って並んだ。さすがに、女先生は恥ずかしそうに両手で胸を隠している。

学級ごとに二列縦隊に並んで、朝礼が始まった。女先生も、両手を下ろして『気をつけ』の姿勢になる。

国旗掲揚と宮城遥拝。そして、今日は初級科教頭の短い訓辞。それから、ラヂオ体操。

朝礼が終わると、校舎へ向かって駆け足。

上級科の生徒は服装をあらためると、また校庭に出て、班別に分かれた。

「東山地区援農班、出発します」

「太田地区援農班、出発します」

「ダイキ鉄工所勤労奉仕班、出発」

正副二名の教師に引率され、足並みそろえて校門から出て行く。

今年の四月から、初級科を除くすべての学校で授業が停止されて、全員が勤労奉仕に駆り出されているのだった。

栄子は、女子ばかり十五人の班に組み込まれている。

「木工作業班、出発します」

また校舎へ駆け戻る。無駄な手間だが、人員点呼のためと、これからは勤労奉仕なのだと気持ちを切り替える意味もある。

三人の男子が木工作業班を追い抜いて、校舎の裏へ駆け去った。倉庫に保管してあるリヤカーを引き出しに行ったのだ。

栄子たちが作る木工品は次の工程へ運ばれ、製材所からは材料が運び込まれる。そのためのリヤカーだ。

昨日作った製品は、下足口横の教室に保管されている。夕方に運び込まれた材料も、その横に並べられてある。

栄子たちは裸足になって、その隣の教室にはいった。上履きは贅沢品なのだ。

一年生が隣の教室から材料の板を運び込み、二年生は長机を寄せ集めた作業台に工具をならべていく。炭火をおこして、ふやかしてお

いたニカワを暖める者もいる。

準備が整ったところで、班長の飯島佳代が号令を掛ける。

「気をつけ、礼」

図工教師の坂下が、教壇から返礼する。

「今日も御国のために頑張りましょう」

十五人が作業台に向かって座り、作業を始める。

四辺に刻まれた凹凸のダボにニカワを塗って箱に組み立てる者、木槌で叩いて圧接する者、細い竹の皮を巻きつけて補強する者——四十センチ四方で天地三十センチの箱が、分業で作られていく。

数がまとまれば隣の教室へ運んで、新たに材料を持ってくる。

箱は塗装屋で防水をほどこされ、肥料工場で爆薬を充填されて、陸軍駐屯所の倉庫へ運ばれる。信管をねじこむ口金を天板の穴に取り付けるのは、兵隊の役目だ。

この木箱の正式名称を、五式木製地雷とい

う。地雷と名付けられてはいるが。本土決戦では老若男女を問わず、これを身体にくくりつけて敵陣へ突入する――とは、暗黙の了解になっている。木箱には、背負い紐を通す溝まで刻んである。

つまり女子生徒たちは、自分を殺すための道具を作っているのだった。

しかし彼女たちに、真剣な眼差しはあっても悲壮の面持ちはなかった。どうかすると、作業の合間におしゃべりの花が咲くことさえあった。

御国のために命を投げ出すのは国民の義務だと教育されて、それを疑う者などいなかった。しかし、生命力に横溢した少年少女にとって、死は観念的な恐怖でしかない。友人家族が死に絶えて自分だけが生き残るほうが、よほど怖かった。

そして栄子もまた――いざそのときには父の名を辱めないよう勇敢に突撃して、何十人もの敵兵を道連れにしてやろうと、心に誓っ

ているのだった。

作業を始めて三十分としないうちに、一年生のひとりが立ち上がった。

「野原知子、お手洗いに行って参ります」

教師に断わって、教室から出て行った。

農作業中は近くの家まで便所を借りに行くのも時間がかかるし、かといって女の子としては外でするのも恥ずかしい。だから、朝礼の前は女子便所が混む。木工作业班の女子生徒は、よっぽど切羽詰まっていなにかぎり、朝礼が終わるまで、余裕があるなら作業にひと区切りがつくまで、遠慮しているのだった。

知子が教室を出て十分ほど経ったとき。

「ひゃあっ……！」

ガチャン！

甲高い悲鳴とガラスの割れる音。一拍をおいて、

「痛いっ……！」

野太い叫び声が聞こえた。

坂下が椅子から飛び上がって、廊下へ駆け

出た。数人の女子生徒が、窓を開けて顔を突き出す。

栄子は、坂下の後から廊下へ出た。

隣の教室の前で、二年生の小島昭夫が右手で目をかばって、散乱したガラス片の中にくすぐまっていた。そのかたわらに、野原知子が両手を口に当てて呆然と突っ立っている。

割れたガラスは、校庭に面した廊下側の窓だった。

「どうしたっ……！？」

教員室から、教頭の林と体育教師の石井がすっ飛んで来た。こんなときにも林は、少国民精神注入棒と称する竹刀を忘れていない。

林は状況を見て取ると、テキパキと指示を下していった。

「石井先生、昭夫を眼医者へ連れて行ってください。太、雄飛。リヤカーから地雷を下ろして、昭夫を乗せろ。女子は、全員でガラスの始末をしろ。壊れた窓は、ガラスの破片だけ取って、そのままにしておけ」

それから、知子に向き直った。

「右目が見えなくては、鉄砲が射てん。おまえは、兵隊をひとり減らしたのだぞ——この非国民！」

頭ごなしに怒鳴りつけられて、ますます知子は蒼白になった。しかし、自分には非がないことを訴える。

「いきなり抱きついてきて、お尻をさわるから……」

「それしきのことで、上級生の男子に暴力をふるったのか」

「暴力だなんて……驚いて、突き飛ばしてしまったんです」

「尻をさわられたくらいで肝を飛ばすとは、精神が弛んだるからだ。こっちへ来い」

林は知子の手首をつかんで、木工作業班の教室へ引きずり込んだ。

「なにをボサッとしとるか。さっさと廊下を片づけろ」

教室に残っていた女子生徒を追い出した。

坂下が教壇から降りて、教室の後ろへ自分の椅子を持っていった。監督下の生徒をかばってやるつもりはないらしい。

知子を除く十四人は、手分けして後片づけに取りかかった。箒と塵取りでガラス片を掃き集め、濡らした新聞紙を細かくちぎって廊下に撒いて、また掃き集めて、最後に乾拭きをする。

「知子ちゃん、絶対に悪くないよね」

「あたしだったら、グウで殴ってるよ」

「これって、絶対に依怙贖戻よね」

手を動かしながら、女子生徒たちはひそひそ声を交わす。

「しょうがないでしょ。小島さんは市会議員様のお坊ちゃまなんだから」

「そうそ。そのうえ、すごく勉強熱心だものね——同じ学年を二度ずつ習うくらいなもの」

悪意と軽蔑を含んだ忍び笑いが、さざ波のように広がる。おしゃべりは横で聞いていただけの栄子も、これには失笑してしまった。

もつとも、昭夫が落第をくり返しているのは成績が極端に悪いからではない。入学試験をしくじって、やむなく国民学校の上級科に進み、学校の授業はほっぽらかして家庭師について受験勉強に専念したにもかかわらず、またしくじったという、いわば現役の二浪なのだった。

それはともかく。空襲に備えて窓ガラスには目張りしてあるので、破片は遠くまで飛び散っておらず、廊下を裸足で歩けるようになるまで、十分とかからなかった。

最初に教室へ戻った生徒は、入口のところで立ちすくんだ。掃除用具を片づけたり塵を捨ててに行った者も教室にはいれず、窓から中をうかがう生徒もいた。

教壇の中央に、野原知子が立っていた。黒板に手を突いて尻を突き出し、両脚を軽く開いている。それが、少国民精神注入棒を受けるときの姿勢なのだが。

尻が剥き出しになっていた。モンペとズロ

ースはたたんで教卓に置かれている。シュミーズはセーラー服の裾をからげて、腰で結ばれていた。

うつむけた知子の顔は、羞恥に赤く染まっている。

「先生！　じか叩きなんて、ひど過ぎます」

「野原さんは女の子なんですよ」

この時代。教師の言葉は絶対であり、たとえ理不尽に思える命令にも従うべし——そのように教育されている。それでもなお、数人の女子生徒が抗議の声をあげた。

「黙れ！」

バシんと、林が黒板を竹刀で叩いた。

びくっと、知子が身をすくめた。

「女子供だからといって、弾はよけてくれん。文句のある者は、知子と並べて少国民精神を注入してやる」

女子生徒たちは押し黙った。

林は十四人を、教壇の前に一列横隊に並ばせた。

ほかの生徒たちが目を伏せている中で、栄子だけは顔を上げて正面を見つめている。

右端に立つ栄子の位置からは、発毛の気配もない知子の平らな下腹部まで覗けるのだが、栄子の視線は、そこにはない。林の顔も見えていない。ただ、顔を上げていただけだった。

林が知子の左後ろに近づいて、右の手の平で尻を撫でた。

「ひゃ……」

知子は、かろうじて悲鳴を飲みこんだ。尻をさわられたくらいで驚いてはいけないのだ。

知子の全身に鳥肌が立ち、膝が小刻みに震えている。

「薄い尻だな。手加減してやるから、最後まで見苦しい真似はするんじゃないぞ。姿勢を崩したり声を出したら、もっと厳しくするぞ」

「……はい」

知子には、ほかに答えようがない。

林が、さらに左へ動いて竹刀を握った右手を真横に開いた。

「いくぞ！」

掛け声とともに竹刀が知子の右尻に叩きつけられた。

バチン！

「くっ……！」

林が薄いと評した尻肉がひしゃげて、ぷるんと弾けた。

赤い筋が右の尻に刻まれて、左の尻にも薄い線条が残った。

バチイン！

二発目は、さらに大きな音がした。

バチイン！

バッチン！

バシイン！

五発を叩くと、林は知子の右へ移動して竹刀を左手に持ち替えた。

バチイン！

バチイン！

同じように五発を叩いてから、林は手を止めた。

知子の尻は、竹刀の痕が重なって、まっ赤に腫れている。

「どうだ。すこしは精神が引き締まったか？」

「はい……ありがとうございます」

心を鬼にして可愛い生徒を叩くのだから、おまえたちは先生に感謝しなければならない。そのように教育されている。

それを心の底から信じている生徒がどれだけいるかはともかく、疑いを口にすれば、いっそう厳しく矯正される。

「ふん。口先ではなんとでも言えるからな」

林は、垂らしていた切っ先を不意に跳ね上げた。

ばしいん。

軽い打撃音だが、竹刀は知子の股間をもろに打ち据えていた。

「きゃああっ……！」

知子は両手で股間を押さえて、教壇にうづくまった。尻を叩かれるのとは比べものにならない鋭い痛みだったが、それ以上に、女の

もっとも恥ずかしい部位を打たれたという衝撃が強かった。

「なんだ、そのざまは。それで精神が引き締まったなどと言えるのか」

林は左手で知子の髪をつかみ、中腰になって右手を股間に差し込んだ。そのまま女性器を掬い上げるようにして、知子を立たせにかかる。

「そこに触れていい男性は、お医者様と将来の夫だけです」

抗議したのは知子ではなかった。

「なにい？」

林が気色ばんだ顔で栄子を振り返った。

「生徒の分際で、教師に意見するつもりか？」

「そんなつもりは、ありません。修身で教わり、父からも諭された世間の常識を申し上げているだけです」

林のこめかみに青筋が浮かんだ。

「おまえ……父親が中佐だからって、いい気になるなよ。たかが陸上勤務の技術士官じゃ

ないか。先生は兵曹あがりだが、兵科だぞ」

ここでいう兵科とは、戦闘において大砲や機銃を操作する直接戦闘員の意である。同じ艦に乗り組む同じ階級同士でも、兵科の者は機関科や主計科のような間接戦闘員を見下す風潮があった。

まして、煉瓦造りの建物の中で机に向かっている者など、たとえ上級将校でも怖くない——と、空威張りを吹かしたのだが。戦死後に特進した階級ではなく、生前の階級である中佐にこだわったあたり、気おくれが透けて見えている。

「父は……関係ありません」

巡査を翻弄していたときに比べて、栄子の口調には遠慮が感じられた。それでも。

「父について申し上げるなら。兵下士官の間で、精神涵養の名目で私刑が横行していると嘆いていたことだけを、お伝えしておきます」

林の顔が朱に染まった。が、この生意気な少女の言動に落ち度はない。

「わかった！」

林は知子に向き直ると、腕をつかんで引っ立てた。

「おまえのような軟弱者に決戦兵器を作らせるわけにはいかん」

廊下に引きずり出して、割れた窓に向かい合って立たせた。下腹部は剥き出しのままだった。

知子は両手を後ろにまわして、赤く腫れあがった尻を隠そうとした。が、頭にバケツを乗せられては、それもかなわなかった。

バケツには防火用水が満々と張られている。両手で支えていなければ、ずぶ濡れになるし廊下を汚してしまう。

「今日は、終業までそこに立っておれ」

林は木工作业班の教室を振り返った。栄子がおとなしく引っ込んでいるのをたしかめると、すこしは溜飲を下げたらしく――ぺちんと知子の尻を軽く叩いてから、教員室へ引き揚げていった。

林への恐怖から解放されて。知子はすすり泣き始めた。木作業班は作業を再開しているので、その物音にかき消されて、嗚咽は女子生徒たちの耳にまでは届かなかった。

午前十時を過ぎたころ、昭夫を眼医者へ連れて行った三人が戻ってきた。それから間もなく。林が知子の前に立った。

「さいわいに、傷は黒目に達しておらなかった。じきに視力も元どおりになるそうだ。よかったな、非国民にならなくて」

先刻とはちがって、穏やかな言葉つきだったが、そのぶん、尻を撫でまわす手がねちっこい。

「罰直は午前中だけで許してやる。午後からは勤労奉仕に戻れ」

すぐに許されるわけではなく、あと一時間半は、屈辱的な姿で立っていないてはならない。

林は教員室へ戻り、二人の男子生徒は木製

地雷の搬出に取りかかった。予定を二時間遅れて、しかも三人分の仕事を二人でしなければならぬというのに、急ぐ様子もない。どころか、教室に出入りするたびに立ち止まっては、目の前にある裸の尻をじっくりと観察する。

「じか叩きなんて、去年の九月以来じゃねえのか？」

「茂だろ。けど、女子ってのは聞いたこともないよな」

何度目かに、二人は知子のすぐそばまで近づいた。

「よく見ると、ケツがデコボコになってる。タンコブみたいだ」

「全体が腫れて、竹刀で叩かれたとこだけがへこんでるんだ」

言いながら、両側から尻を撫でまわす。教頭先生がお手本を示してくれたのだから、見習って悪いわけがない。

知子は、バケツの水をこぼさないよう、身

じろぎひとつできずに、耐えているしかない。

二人の悪童は、夢中になって下級生の尻を撫で、それでも飽き足らずに、横合いから股間にまで手を差し入れた。

「いやあ！　お願い、やめてください」

その悲鳴は木工作業班の教室まで届いていたが――坂下は教壇の隅に据えた椅子から動こうとはしなかった。

そのとき。つと栄子が立ち上がった。教室を出て、悪童たちに近づく。

「そんなことをして楽しいの？」

痴漢行為に没頭している悪童ふたりの背中に、冷たい声を浴びせた。

ぎょっとして振り返る長谷川太と出井雄飛。

「う……」

ふたりがうろたえたのには理由がある。

去年の十一月。栄子が転校してきた初日に、小島昭夫が大胆な行動に出た。背後から抱きすくめて、胸の膨らみを両手で驚づかみにしたのだ。

栄子は悲鳴もあげず、身をふりほどこうともしなかった。顔だけ振り返って、今と寸分たがわぬ質問をしたのだった。

昭夫は面食らった顔になったが、すぐに居直った。

「そりゃあ、楽しいさ。おまえ、でかい乳だな」

「慮外者！」

おそろしく古風な言葉が、少女の口からほとぼしった。

「か弱い婦女子を護ってこそその大和男児ではないですか。このような不埒な真似に及ぶなど、恥を知りなさい！」

もしも教師とか近所の頑固爺あたりから同じことを言われていたら、恐れ入って頭を下げて、内心では赤ンベエをしていただろう。

しかし、年下の少女から威風堂々と叱られたとなると、不気味さが先に立った。

「詰め物でもしてないか、ちょっとたしかめだけさ」

捨て台詞にもならない言い訳をつぶやいて、昭夫は逃げ去った。

太と雄飛は、昭夫の腰巾着だった。親分が敵わない相手に、子分が立ち向かえるはずもない。ふたりは、バツの悪そうな顔で知子からはなれた。

ふたりがせっせと搬出作業を再開しても、栄子は立ち去らなかつた。知子の後ろにしゃがんで、セーラー服をからげているシュミーズの裾をほどいて、きちんと直してやった。

「もっと、ちゃんとしてあげたいけれど、林先生に叱られるかもしれないから、これで我慢してね」

立ち上がると。栄子は教室に戻らず、教員室へ向かった。

大半の教師は勤労奉仕班を引率して、教員室にいるのは、林と石井のほかに三人だけだった。

「野原さんの衣服が乱れていましたので、わたしが直してあげました」

栄子が直立不動の姿勢で、林に報告する。

栄子としては、知子が咎められないためにしたことではあったが。

少国民精神注入棒で叩けるものなら叩いてください——と、挑発しているように受け取られても仕方のない言動だった。

「……うむ、ご苦労。勤労奉仕に戻れ」

苦虫をかみつぶしたような顔で答えて、あとはそっぽを向く林だった。

——これ見よがしにドイツ処女同盟団の制服で闊歩し、事あるごとに海軍大佐の威光をひけらかす。それは、彼女が自分のまわりに築きあげた防御壁に他ならない。

髪の色が違う肌の色が違う瞳に色が着いている。それが原因で仲間外れにされ、虐められ、心無いおとなたちからもあからさまな差別を受けた。ところが、母親が海軍士官の奥様だと知るや、おとなたちは手の平を返したように少女をちやほやした。

大東亜戦争が始まってからは、なおさらだった。母親の母国は、世界で孤立した日本の数少ない同盟国なのだ。

虐められないために、差別されないために、少女は精いっぱい虚勢を張っているのだった。

少女がドイツ処女同盟団の制服を模倣したのは、伯父の家に寄宿してからだった。

空襲で焼け出された母娘は、住む家を失った。遺族恩給のおかげで、経済的な余裕はある。しかし、資材と人手の欠乏している世相では、家の再建など思いもよらない。そして、借家の申し込みはことごとく断われた。

「海軍大佐の奥様にお貸しできるような家じゃないです」

それが口実に過ぎないことくらい、栄子にもわかった。

母娘が頼れる先は、夫の実家しかなかった。

中尾の本家は、二十町歩の小作地と五軒の家作を有している。食べる口が二つ増えたく

らいでは、びくともしない。

世話になるお礼にと峰子は遺族恩給の一部を差し出したのだが、大一は突っ返した。

「わしに恥をかかせるな。義理の妹が困っているのに家賃だの食い扶持だのを取っては、世間様に合わす顔がない」

とにかくも、母娘は衣食住の安心を得た。しかし、地域社会に受け容れられるための戦いを、最初から繰り返さねばならなかった。

母親の峰子は、隣組の行事や防空演習に人一倍熱心に参加して、日ごろは常に控え目に振る舞うという形で。

栄子は、母に無心して古着を買ってもらい、制服に仕立て直すという形で。ドイツ人が見ても本物と区別がつかないくらいの出来栄えになったのは、栄子の記憶の中で制服は憧れの存在だったからだろう。

もともと、制服の威光など歯牙にも掛けぬ人物が身近にいた。他ならぬ伯父の大一だ。

生活の面倒をみてもらっているのだから、

母娘は大一の支配下にある。

この時代、家長の権威は絶対だった。それなりの理由があれば、妻を離縁するのも、子供を勘当するのも認められていた。法律でいくらか制限されているとはいえ、息子を年季奉公に出すのも、娘を遊郭に売り飛ばすのも、家長の権利だった。

そこまではしなくとも。もしも伯父が勝手に縁談を決めてしまえば、栄子はそれに従うか、家出するしかないのだった。

だから。一緒に風呂にはいろうと誘われれば、断われない。

西洋人の感覚からすれば、とんでもない不道徳であり、性的虐待でさえあるのだが。

「これが日本の風習だ。裸のつきあいというやつだ。ひとつ風呂で肌と肌を触れ合せれば、自然と心も通うようになる」

などと強弁されれば、峰子も言い返せない。鬼畜米英の宗教であるキリスト教に基づく倫理観など、口にできるわけもない。

峰子は、まさか不埒な真似はしないだろうと、義兄の良識を信じるしかない。

栄子は、伯父に背を向けて大急ぎで身体を洗い、掛け湯だけでカラスの行水さながらに風呂場から逃げ出すしかなかった。

そういった悩みを抱えながら、すくなくとも家の外では、栄子の防御壁は、巡査だろうと教頭だろうとはねつけるだけの強固さを保っていた。

しかし。防御壁が崩れ落ちる日は、目前に迫っていたのだった。

2：母親逮捕

五月九日の朝。

「大変だ。みんな、集まれ」

卓袱台に新聞を広げるなり、大一が大声をあげた。

いったい何事と、妻の菊が台所から姿を表わす。峰子と栄子は洗濯物を置いて、裏庭から馳せ参じる。

この四人が、中尾家の全員だった。先代は鬼籍にはいり、大一の二人の息子は出征したまま音信もない。

「これを見ろ」

一面の片隅にある小さな見出しを大一が指差した。

独逸全軍無条件降伏

ヒトラー総統所在不明

「ウンヴィルクリッヒ……！」

峰子が息を呑んだ。

本来なら一面ブチ抜きでもおかしくはない。扱いが小さいのは、国民の士気への悪影響をおもんばかってのことてだろう。

「いよいよ、大変な時局になった。ヨーロッパの連合軍までが、日本に押し寄せて来る。もはや時間の問題だ」

負けると言ったに等しい。

「それでも、日本は勝ちます」

栄子が、強い口調で言い切った。

「主敵の鬼畜米英は、両方の人口を合わせても三億足らずです。わたしたちが、一人で四人ずつやっつければ、絶対に勝てます」

四人どころか。一機よく一艦を屠る神風特別攻撃隊もある。今は苦しくても、最後には必ず勝つ——それを疑う生徒など、ひとりもない。

現実には。レーダーで探知されて圧倒的多数の戦闘機に迎撃され、最後にはVT信管付砲弾の熾烈な対空砲火で叩き墜とされている

という事実は、生徒ばかりか大人にも知らされていない。

「鉄は無い、アルミは無い、石油も無い。竹槍で敵を突き刺す前に、機関銃で蜂の巣にされるだけだ」

栄子は居住まいを正して伯父を見つめた。

「わたしたちが木製地雷を作っているのを、伯父様もご存知のはずです。軍艦も飛行機も、木製化が進んでいるそうです。材木なら、日本には無尽蔵にあります」

「燃料が無くて動かんけりゃ、役に立たん」

「学校では、初級科のみんなで菜の花を植えています。日本じゅうの学校で取り組めば、たくさんの油が取れます」

「しかしな……」

言いさして、ふっと大一が苦い顔になった。のは、一瞬。表情をやわらげて、うんうんとうなずいた。

「そうだな。栄子ちゃんの言うとおりに。鍋釜を鋳つぶせば、まだまだ発動機も造れる。

じゅうぶんに戦える。敵の侵攻は秋になるそうだから、神風も必ず吹くだろう」

大一は、少女の言い分を認めたのではない。銭湯での世間話だろうが酔っ払っての放言だろうが、日本が敗けるなどと口にすれば、翌日には特高警察にしょっ引かれている。密偵に聞かれるよりも隣人の密告が恐ろしい。

世間知にうとい少女が、うっかり口を滑らそうものなら――国策に協力して物資供出の音頭を取り、愛国号の奉納にも多額の寄付をしてきた大一といえど、無事ではすまない。

「あら、お味噌汁が煮え立ってしまいました」

匂いに気づいて、菊が大慌てで台所へ戻っていった。

「朝ご飯までに、洗濯物を干さなければ」

峰子が栄子を急き立てて裏庭へ取って返す。

そのようにして、ドイツ敗北の大波は中尾家を通り過ぎた。

しかし家の外では、まだ波風が立っていた。

通学路の交番では、顔見知りの中年の巡査

が立ち番をてしていた。栄子たちが引っ越して来てすぐに、家族調査に訪れた松永という巡査だった。松永の実際の階級は巡査部長だが、栄子にとって警察官は、お巡りさんと刑事さんしかいない。

「おはようございます」

会釈して通り過ぎようとする、呼び止められた。

「その服装は、まずいと思うよ」

「え……？」

栄子は、いつもと同じドイツ処女同盟団の制服もどきを着ていた。

「ドイツが敗けたことは知っているね。三国同盟のイタリアは、降伏後にドイツの敵にまわったからね」

今後はドイツもそうなるだろう。敵国の服を着て外を歩けばどうなるか。

「家に帰って着替えるのが一番だが。せめて、その首巻きくらいは取りなさい」

栄子は、松永巡査の言葉に素直に従った。

人目につきやすいカーデガンも脱いで、まとめてリュックサックに押し込んだ。

「これからは、気をつけます」

——学校では、さすがに栄子を敵国人扱いする者はいなかった。けれど、いつにも増してよそよそしい雰囲気だった。ただひとりを除いては。

「おはようございます。お母様の国、大変なことになりましたね」

一年生の野原知子だった。下脱ぎで立たされて上級生から痴漢行為をされていたところを助けてもらって以来、栄子になつて、なにかと話しかけてくるようになっていた。

「おはよう」

「お母様のご家族、無事でいらっしゃると思いますね」

「ありがとう。でも……いえ、なんでもないわ」

敵に捕らえられれば、男は殺され、婦女子は辱められ慰み者にされる。そう教えられて

いるけれど。ドイツ人は鬼畜米英と同じ白人だから、そこまではされないだろう。そう考えて、同時に、それを口にしないだけの分別もはたらいたのだった。

知子も栄子と同じように、おしゃべりの輪には加わらず、教室の隅で時間をつぶしている。ぎりぎりに駆け込んでくることも多い彼女が、こんなに早く登校していたのは、栄子を慰めるつもりだったのかもしれない。

しかし。学校では、ドイツの敗戦などなかったかのように、昨日と同じ一日が過ぎた。朝礼のときでさえ、訓辞ではひと言もふれられなかった。

そうして。次の日も同じ営みが繰り返される。わずかな変化といえば――挨拶以外は言葉を交わさなくなった木工作業班の中で、知子だけが変わらずなついてくれていることに、栄子は戸惑いながら好意も感じていた。

もしも、戦時下は戦時下なりに日常生活が続いていけば、あるいはふたりの間に禁断の

感情が芽生えていたかも知れない。

しかし運命の大波は母娘を、ともどもに地獄の底に沈めようとしているのだった。

五月十日、深夜。玄関の雨戸が激しく打ち叩かれた。

「開けろ。特別高等警察だ」

大一が飛び起きて、怯えた顔であたりを見回す。やはり、栄子が口を滑らせたのか。それとも、女房が井戸端会議でも――などと詮索して、どうなるものでもない。

隣で寝ている菊を揺り起こして。

「もし何かあったら、すぐ山上先生に電話してくれ」

山上というのは、大一が昵懇にしている弁護士だった。

おそるおそる雨戸を引き開けた大一だったが、特高警察の狙いは彼ではなかった。

「中尾峰子は、どこだ？」

背広姿の男が、土足のまま上り框を踏み越

えた。所在を尋ねておきながら、大一を突き飛ばして奥へ進む。制服姿の巡査が二人、その後が続いた。

背広の男は迷うことなく、離れに続く廊下を突き進んだ。

峰子は寝間着のまま布団の横に正座して、闖入者を迎えた。栄子の姿は、ない。峰子が隣の間へ隠したのだ。そのために、衣服をあらためる余裕がなくなった。

「沼野さん。こんな夜中に押し掛けるとは非常識です」

峰子が背広の男を非難した。この男には何度も言い寄られて、そのたびにはねつけている。今夜の騒ぎも、その延長だと思ったのだ。

沼野と呼ばれた背広姿の男は、峰子の言葉を無視した。

「中尾峰子。スパイ容疑で逮捕する」

言うなり、峰子に襲いかかった。

「なにをなさるんですか!？」

「暴れるな。抵抗すると罪が重くなるぞ」

沼野は峰子をあお向けに突き倒すと、馬乗りになって襟をつかみ、乱暴に左右に揺すぶった。

「ええい、暴れるなというのがわからんか」

峰子は突然の暴力に怯えて、男の手から逃れようともがいている。

峰子の寝間着が左右に押し開かれて、夜目にも白い乳房が露わになった。

「電気を点けろ」

巡査のひとりが電球に手を伸ばしてスイッチをひねった。まばゆい光の中に、峰子の半裸が浮かび上がる。

沼野は峰子を引き起こして膝で背中を押さえつけながら、腰の捕縄をほどいた。

「やめてください。抵抗なんかしていません……いやです！」

腕を寝間着の袖から抜かれて上半身を裸にされ、峰子の声に悲鳴が混じった。

沼野は峰子の両腕を背中にねじり上げると、素早く手首を縛った。その縄尻で首を巻いて、

さらに手首を吊り上げた。

一分とかからずに、峰子は縛り上げられてしまった。子供に乳をふくませたようには見えない張りのある乳房を手で隠すことはもちろん、首を扼されているのでうつむくこともできない。

「なぜ、こんなことをするのですか。意趣返しにしてはひど過ぎます」

沼野は正面にまわって、内ポケットから取り出した紙片を峰子の鼻先に突きつけた。

「これに見覚えがあるな？」

「……………」

それは一枚の写真だった。戦艦が波を蹴立って走っている。写真の余白には、戦艦の名前と主要諸元（排水量、速度、主砲口径など）が書き込まれている。写真を裏返すと、そこには筆記体の横文字が書かれてあった。

「これは……どうして、あなたが持っているのですか」

峰子はこの絵葉書に見覚えがあった。七年

か八年前に、クリスマスカード代わりに国の両親へ宛てたものだった。

「郵便局で見つけて、差し押さえてあったものだ」

これがスパイ容疑の動かぬ証拠だと、沼野が言う。

「でも、これは報国献金の絵葉書です。秘密でもなんでもありません」

「国内ではそうでも、外国宛てとなると話は別だ」

「そんな馬鹿なことって……」

「言いたいことがあるなら、取り調べのときに自白しろ」

巡査が両側から峰子の腋に手を入れて強引に立たせた。

「待ってください」

襖を開けて、栄子が飛びこんできた。母親と刑事の間に割ってはいる。

「母がスパイだなんて、言いがかりです。父は、名誉の戦死を遂げた海軍大佐です。その

妻をスパイ呼ばわりするのですか」

バシン！

沼野がいきなり栄子の頬を叩いた。

「話は逆だな。スパイをはたらくために、海軍士官に色仕掛けで迫ったに決まっている」

「そんな……」

絶句した栄子を、大一が横へ引っ張った。

「警察に逆らってはいかん。きちんと調べてもらえば、峰子さんの疑いは晴れるのだから」

その間にも、沼野は義兄と娘の目の前で寝間着の帯をほどいて、その代わりに腰縄を打った。ますます寝間着がはだけて、太腿まで剥き出しになった。どうかすると秘所まで見えてしまいそうな、きわどい姿だった。

「さっさと歩け」

沼野が、縄尻で峰子の尻を打った。

峰子がためらっていると、巡査が肩を押して、強引に歩かせる。

「待ってください。せめて、着物の乱れは直してください」

「気にするな。こんな夜中だ、誰も見てはいない」

半裸のまま外へ連れ出すつもりらしい。

「お巡りさんたちが見ているじゃないですか」

栄子は枕元にたたんで置いてある着物を広げて、母に着せ掛けようとしたが。

「公務の邪魔をするな」

沼野にお下げをつかまれて引き剥された。

「お願いします。これくらいは……」

なおも食い下がろうとして、栄子は後ろから抱き止められた。どさくさ紛れに乳房をつかまれているのだが、それにも気づかない。

「やめなさい。いつときの辛抱だ。刑事さんと言い争っても埒が明かん」

「年の功だけあって、物分かりがいいですな。心配しなさんな。すぐにでも埒を明けてしまいますから」

大一に向かって、含みのある言い方をしてから。また縄尻で峰子の尻を打った。

「とっとと歩け。それとも、裾をまくって生

尻を叩いてやろうか」

およそ、警察官の吐く言葉ではない。まったく事情を知らない者の目にも、この刑事が私怨それとも情欲で動いているように見えただろう。

栄子は裸足のまま外へ引き出された。

肌もあらわな姿で連行される峰子の後ろ姿を見送ったのは、大一と菊だけだった。栄子は、離れの間で呆然と突っ伏している。

「心配するな。特高の上のほうにも知り合いがいる。明日の朝一番に掛け合ってみる」

大一の言葉にすぎるよりほかに、栄子にできることはなかった。

そのまま眠り込んでしまった栄子は、翌朝になって、予定より二週間も早く生理になっていることに気づいた。いつもと違って鮮やかな血の色で出血量は少なく、腹痛もほとんどなかった。

しかし、とても勤労奉仕に出られる精神状

態ではなかった。

特高警察何するものぞの鼻息で掛け合いに行った伯父は、昼前に慄然とした顔で戻ってきた。

「どうもいかん。意図してスパイをしたか否かはともかく、あの絵葉書をドイツへ出した行為は、軍機保護法に違反しているそうだ」

公知の事実を外国へ通牒して実刑判決を受けた先例もあるという。

「そうは言っても、中尾の家から縄付きを出すわけにはいかん」

できれば嚴重説諭のうえで不起訴。最悪でも執行猶予は勝ち取らねばならん。山上先生に尽力していただくだけでなく、如何なる非常の手立ても厭わない——大——は、賄賂までにおわせた。

正義感の強い少女にしてみれば、聞き捨てるに出来る話ではない。しかし、自分の母親が無実の罪に問われようとしている。

昨夜のやりとりを聞いていると、母と刑事

との間には、個人的ないさかいがあったらしい。公権力を私利私欲に乱用しているのだ。

「どうか、よろしく願います」

栄子は、伯父に向かって深々と頭を下げたのだった。

翌日も、栄子は勤労奉仕を休んで家に引きこもっていた。予定外の生理はいつもよりずっと軽く、三日目なのに出血も止まりかけていた。身体が楽になると、ますます不安がつる。

できることなら、母の顔をひと目でも見たかった。しかし、面会はかなわない。弁護士の山上でさえ門前払いを食らったと、伯父は憤慨している。伯父がどれほど特高の上層部に顔が利くか、怪しいものだった。

明けて十三日は日曜日だが、戦時下に休日など無い。すでに生理も終わっている。しかし、母のことが気がかりで、勤労奉仕どころではなかった。

伯父は朝から晩まであちこち出歩いている

が、そのうちのどれだけを母のために割いてくれているか、栄子は疑念を持ち始めた。

栄子からは尋ねにくい。弁護士が門前払いされるとなると、残された手段は賄賂だけだから、伯父に悪事をそそのかすことになる。

月曜日の朝を迎えても、栄子は寢床でぐずぐずしていた。母がどうしているかと思うと、起き上がる気力も萎えてしまう。

特高が容疑者を拷問に掛けるとは、誰も声高に語らないが周知の事実だ。逮捕のときから半裸にされていたように、女性には辱めも加えられると聞いたことがある。

母が裸にされて殴る蹴るの乱暴を受けているのではないかと想像すると、栄子は気が狂いそうになる。

裸にされるよりもひどい辱めや、殴る蹴るよりも残酷な拷問があるなどとは、少女の想像の埒外だった。

そして。ふっと思った。自分がこうして勤労奉仕を怠けていれば、それは――母がスパ

イだから、世間に顔向けできなくて家に隠れていると思われはしないだろうか。

母が無実潔白なら、自分はいつもと同じように堂々と振る舞うべきだ。

どんなにつらくても、明日からはちゃんと勤労奉仕に出よう。栄子は、そう決心した。

しかし、それは無駄な決心だった。

栄子がどんなに立派に振る舞おうと——たとえ母が逮捕された翌日も生理をおして勤労奉仕に出ていたとしても、結局は同じ恥辱に見舞われていただろう。しかし、四日も勤労奉仕を休んだことは、栄子を狙っている男に格好の口実を与えてしまったのだ。

「中尾栄子は在宅ですか」

玄関口で呼ばれる声を聞いて、栄はいやな予感に捉われた。

襖が開けられたそこには、伯母と林教頭が立っていた。さすがに林も、少国民精神注入棒までは持参していない。

「今日も生理痛だと連絡があったが、ほんとうか」

質問ではなく、嘘だと決めてかかっている口調だった。

「はい……」

そう答えるしかない。

「たしか二週間前も、そう言って二日ほど休んだな。また生理とは、おかしいじゃないか」

「それは……」

「嘘か本当か、先生がたしかめてやる」

林は栄子の横に膝を突くと、いきなり布団をめくった。寝間着の裾に手を突っ込もうとする。

「ひゃ……」

栄子は身をよじって逃れようとしたが、肩を押さえつけられた。

「やめてください！」

下半身をかばおうとする手を払いのけられて。言葉で懇願はするが、たとえば林を蹴飛ばすとか引っ掻くとかはしなかった。先生に

手を上げるなんて、とんでもないことだ。

「先生……どうか、お手柔らかに」

菊のとりなしにも、林は耳を貸さない。

栄子はズロースの中まで手を突っ込まれ、
割れ目に指を突き立てられた。

「痛いっ……！」

林が指を抜いて、手の平を栄子に向けてか
ざした。

「出血していないじゃないか」

「土曜日までは、ほんとうに生理だったんで
す」

林が薄ら嗤いを浮かべた。

「つまり、昨日と今日はズル休みだと認める
んだな？」

あっと思ったが、もう遅かった。

「……ごめんなさい。明日から、ちゃんと行
きます」

「ふざけるな！」

林に怒鳴りつけられて、栄子はびくっと身
をすくめた。

「今すぐ、学校へ来い」

林は栄子の手首をつかんで、強引に立たせた。そのまま、部屋の外へ引きずり出そうとする。

「待ってください。着替えさせてください」

「無用だ。皆が汗水垂らして滅私奉公しているときに、のうのうと怠けていた姿を、街じゅうの人に見てもらえ」

「先生。年頃の娘を寝間着で歩かせるなんて……許してやってください」

「そうやって甘やかすから、いかんのです。母親のように、縄を掛けて裸で引きずり回してもいいんですよ」

家にこもっていた栄子は知らなかったが、峰子がスパイ容疑で逮捕されたことはもちろん、裸も同然の姿で連行されたことまで、街じゅうの噂になっているのだった。

栄子は靴を履くいとまも与えられず、寝間着のまま家の外へ連れ出された。

手首をつかまれて、ずんずん引きずられる。

道行く人は呆気にとられて二人を眺めるが、引きずられている少女の髪の色に気づくと、わざとらしく目をそらす。

悪いのはスパイの娘のほうに決まっている。変にかばい立てすれば、自分にも難が及ぶ。

交番に立っている新前巡査も、怪訝な顔をしただけで、林を呼び止めようとしめない。

とうとう栄子も諦めて、林の背中に隠れるようにして、自発的に歩き始めた。

栄子は、木工作業班の教室に追い立てられ、皆と向かい合って教壇に立たされた。

「こいつは、生理だと嘘をついて四日もズル休みをしておった。親子そろっての非国民だ。こんな輩は、少国民精神注入棒くらいでは、どうにもならん。根本から叩き直してやる」

栄子の前に並ばされた十四人の女子生徒たちのうち十三人までは目を伏せている。野原知子ひとりだけが顔を上げて、栄子を見つめていた。今にも泣き出しそうな顔だった。

どんなに厳しい罰を受けても、我慢しなけ

ればならない。悪いのはわたしだから——栄子は反省とともに覚悟を決めていた。

しかし、その覚悟は林のたった一言で粉碎されてしまった。

「着ている物を全部脱げ」

栄子は、聞き間違いだと思った。

「あの……？」

「日本語がわからんのか。素っ裸になれと言ったのだ」

「……………！？」

思春期の少女が、級友たちや男先生の目の前で、できる行為ではなかった。

けれど、先生の命令には逆らえない。

栄子は唇を噛んで息を詰めて、寝間着の内紐をほどきにかかった。指が震えて、紐をしっかりとつかめない。

「なにをもたもたしている。先生が手伝ってやろうか」

「すみません。すぐ……」

脱ぎますとまでは、恥ずかしくて言葉に出

来なかった。

帯はしていないから、内紐がほどけると、前は大きくはだける。小さく盛り上がった乳房が、白日の下に晒される。

白い肌を羞恥に染めながら、栄子は寝間着を脱いだ。皮膚を剥ぎ取られるよりもつらかった。教卓に寝間着を広げて、きちんとたたむ。一秒でも時間稼ぎをしたい気持ちと、何もかも一秒でも早く済ませてしまいたい気持ちとがせめぎ合う。

栄子は黒板に向かって立ち、いっそう激しく震える指をズローズのゴムに掛けた。

「ちゃんと前を向け」

林が、これ以上はない（と、そのときの栄子は思った）残酷な指示を出す。

栄子は、ふたたび級友たちと向き合った。教室の後ろに立って腕組みをしている図工教師の坂下と目線が合って、あわててうつむいた。

栄子は大きく息を吸い込んで、一気にズロ

ースを膝まで下ろした。とたんに、股間を熱風に吹かれたような錯覚に陥った。

脱いだズロースは寝間着の下に隠した。

熱風の錯覚が去ると、今度は股間に触れる空気の冷たさに怯えた。わずか一枚の布きれが、どれだけ自分を護っていてくれたかが、はっきりとわかった。

「気を一、つけッ」

林が号令を掛けた。

栄子は、胸と股間をかばっていた手を、断腸の思いで下におろした。軍事教練で教え込まれたとおりに、両踵をきっちり付けてつま先を六十度を開き、両手は体側に付けて背筋を伸ばす。

手の平にすっぽり収まりそうな胸の膨らみも、まだ子宮の位置も定かでない平らな下腹部も、丘の上半分だけをおおっている栗色の淡い萌え草も、すべてが級友たちと二人の男性の前に晒された。

気が遠くなりそうな羞恥に、栄子の身体が

かすかに揺れている。

「せいれ一つ、休めッ」

先生は鬼だ——と、栄子は思った。

整列休めの姿勢は左足を真横に二十五センチ開いて、両手は腰の上で組む。裸でそんな姿勢になれば、股間の割れ目どころか、そこからわずかにはみ出ている貝の足のような肉襞まで見えてしまう。腋の下の萌え草も隠せない。

栄子は、全身がカアッと熱くなるのを感じながら、号令に従った。

「その姿勢を崩すなよ。情けない声なんか出すんじゃないぞ」

正面に立った林を見て、栄子は安堵すると同時に訝しんだ。林は竹刀でなく教鞭を手にしていた。五十センチほどの細竹だ。あんな物で叩かれても、たいして痛くない。

しかし。乳首を教鞭の先でつつかれて、栄子は林の残忍さをあらためて思い知った。

「いくぞ！」

林が教鞭を真横に引いた。

ひゅんっ、パシイン！

乾いた音と同時に、乳房がひしゃげて左から右に流れる。

「きひいっ……」

乳房が弾けたと思ったほどの、鋭い痛み。

栄子は両手で胸を押さえてうずくまった。

「先生に言われたことは、ちゃんと守れ」

林は栄子の喉をつかみ、股間を下から搦い上げるようにして、無理やりに立たせた。

「たしか、医者と夫以外は、ここに触れてはいけないのだったな？」

中指を割れ目に食い込ませる。

「……は、はい。そうです」

知子ちゃんをかばったことを、根に持っているのだと——栄子は悟った。

「心配するな。おまえのような非国民を嫁にする男はおらん」

栄子の足を蹴って開かせ、手首をつかんで『整列休め』の姿勢を取らせた。

「もう一度だけ言うぞ。姿勢を崩すな、声を出すな。また無様な真似をしたら、校庭の樹に縛りつけるぞ」

そのうえで乳房を叩いてやると、林が脅す。
「……はい。もう無様な真似はしません」

栄子は両脚を踏ん張って歯を食い縛り、背筋をぴんと伸ばした。乳房を突き出して挑発しているようにも見えることに、栄子は気づいていない。

ふたたび、教鞭が宙を切り裂いた。

ひゅんっ、パシイン！

「く……」

栄子は悲鳴を噛み殺して、意志の力で両手を腰の後ろから動かさなかった。

ひゅんっ、パシイン！

ひゅんっ、パシイン！

教鞭が往復するたびに、乳房が左右に跳ねる。赤い線条が刻まれていく。

「ぐあ……」

乳首を直撃された瞬間、栄子は悲鳴をあげ

かけて、口を半開きにしたまま全身を硬直させた。それでも、息を詰めて声を封じた。

「ふう……」

林が息を吐いた。左手で右腕を揉み始めた。「腕が疲れた。しかし、おまえの胸から怠け心を叩き出してやるまで、先生も頑張るぞ」
「……………」

これで終わりではないと知って、栄子は目の前が暗くなる思いだった。

林が教鞭を左手に持ち替えた。

斜めに振りかぶって、斜めに打ちおろす。

ひゅんっ、パシン！

右の乳房がひしゃげて、まだ肌の白さをとどめていた乳房の根元に赤い筋が刻まれた。

林は逆手に振りかぶって、左の乳房を打ち据えた。

ひゅんっ、パシン！

右左右左と交互に、合計で十発ほども打って、ようやく林は教鞭を黒板に戻した。

「どうだ。おまえの胸から怠け心を叩き出せ

たかな？」

「はい、ありがとうございます。たった今から心を入れ替えて、滅私奉公に励みます」

「心にもないことを言うな。怠け心は叩き出してやったが、おまえには、まだ少国民精神が欠けておる」

これからが本番だとばかりに、林は教室の隅に立て掛けておいた竹刀を握った。

「気を一、つけっ！ 回れ一、右っ！」

栄子は泣きたい気持ちで、命令に従った。しかし、涙はこぼしていない。

林先生の罰は非常識だ。でも、ズル休みしたのだから、罰を受けるのが当然だ。栄子は、まだそう考えている。

知子ちゃん、がっかりしただろうな。せめて、毅然と罰を受けて、これ以上がっかりさせないように頑張ろう。

「両手を黒板に突いて、尻を突き出せ」

林はふつうの口調で、しかし無慈悲に命令した。

栄子は素直に従う。

「わかっているな。醜態を晒したら――樹ではなく鉄棒にするぞ。左右の支柱に足首を縛りつければ大股開きだ」

その姿を想像して、栄子は鳥肌を立てた。

林が栄子の斜め後ろへ回り込んだ。

視界から林の姿が消えるのが怖くて、栄子は顔をうつむけて、腋の下から覗き込む。

林が両手で竹刀を振りかぶるのが見えた。

(……………！)

知子に少国民精神を注入するときは、手加減すると言った林だが、栄子に対してはそんなつもりもないらしい。

「いくぞ！」

ぶんっ……太い竹刀が風を切って重く唸る。

バッシインン！

容赦のない一撃が、知子に比べればずっと成熟した丸い尻に叩きつけられた。

栄子は、かすかな呻きすら漏らさずに、息を詰めただけで耐えた。重たい痛みだが、乳

房を打ち据えられるよりは、しのぎやすかった。

ぶんっ、バッシインン！

ぶんっ、バッシインン！

左右の尻たぶを交互に叩かれて、V字形の赤い線刻が重ねられていく。

二十発も打たれると、尻全体がまっ赤に染まった。

それでも、林は少国民精神を注入し続ける。ちゃんと数えていたのだろう。ぴったり五十発で竹刀を止めた。

「どうだ。すこしは少国民精神が身に沁みたか？」

「はい。ありがとうございました」

視界の端で竹刀が床に這うのを、栄子を見ていた。知子が最後に股間を打たれたのを、まざまざと思い出した。

羞恥の根源への打ち込みに備えて、栄子はいっそう脚を踏ん張り、息を止めたのだが。

バチイン！

「きゃああっ……！」

知子への軽い一撃とは比較にならない、下段からの斬り上げだった。股間が爆発して、衝撃が脳天まで突き抜けた。

栄子は知子と同じように、両手で股間を押しさえてうずくまった。

林は趣向を変えて、栄子の両腋に手を差し入れると、乳房を驚づかみにしながら立ち上がらせた。

立て続けの凌辱に、栄子は言葉を失っている。

「精神注入棒が効かんとすると——身体の芯に大和魂を叩き込んでやらんといかんな」

林は、また『整列休め』の号令を掛けた。しかし栄子は、すぐには従わなかった。

「せ、先生……」

身体の芯とはどこを差しているか、栄子だけではなく、この場の全員が理解していた。

「お願いですから、もう赦してください」

股間をかばったまま、栄子が訴える。

「それが、目上の者をお願いする態度か！」

林が怒声を浴びせた。

教室の後ろで坂下が苦笑したが、誰も気づかなかった。

「そこに土下座しろ。床に額を擦りつけて、どうぞ赦してくださいと、涙のひとつもこぼしてみせろ」

「……………」

栄子は、呆然と林の顔を見つめた。

それはたしかに——ちゃんと頭を下げなかったのは、不躰と言われても仕方がない。けれど、土下座だなんて。

落第を免れようとして土下座した男子生徒の伝説を思い出した。

栄子は、ちらっと知子の顔を見た。

知子は、今も栄子をひたすらに見つめている。その両目に涙があふれている。

もしも自分が土下座をして、卑屈に赦しを乞ったら、知子ちゃんは涙を拭うだろうか。

栄子は、伝説の結末も思い出した。結局、

その男子生徒は落第したのだった。

どうせ、自分も伝説になるだろう。惨めな結末が残るのは、裸を晒すよりも恥ずかしい。

栄子は『整列休め』の姿勢をとった。

「卑屈な振る舞いで罰を逃れようとした栄子が間違っていました。どうか、大和魂を叩き込んでください」

言い切って、栄子は毅然と頭を上げた。

知子が両手で顔をおおって、うつむいた。

林は驚いた顔をしたが、すぐに薄ら嗤いを浮かべた。

「いい覚悟だ。さすがに、海軍大佐殿のご令嬢だな」

林は教鞭を手にとった。

「自分から申し出たのだからな。鉄棒に縛りつけられるのが厭なら、最後までちゃんと立っているんだぞ」

教鞭の先で、割れ目の上端に盛り上がっている肉の蕾をつつく。

「あ……」

場違いな感覚が股間に走って、栄子はうろたえた。そこにそういうものが付いていることは知っていたが、そこに触れると、おしっこを漏らしそうになるほど気持ちがいいとは、まったく知らなかったのだ。

林が一步下がって、教鞭を床に向けて垂らした。

「いくぞ！」

びしっ！

「ぐっ……！」

割れ目の奥まで細竹を叩き入れられて、栄子は息を詰まらせた。乳房を叩かれるよりもずっと鋭い、ずっと大きな、凄まじい衝撃が脳天まで突き抜けた。

膝が砕けそうになるのを、両脚を踏ん張ってこらえた。

栄子が姿勢を立て直すのを待って、林が二発目を打ち込む。

「……………」

最初は、どれほどの痛みか予測もできずに

怯えていた。二発目は、心の準備ができていた。とはいえ、激痛がやわらぐわけではない。

たたらを踏んで、黒板に肩をぶつけた。

そこへ林が踏み込んできて、三発目――は、空振したように見えた。

「ぎゃはあっ……」

ついさっき快感を強いられた部分を細竹の先で打たれて、栄子は、少女の華奢な身体に似合わぬ声で吠えた。

股間を両手でかばって、ずるずると崩れ落ちた。土下座と同じ姿勢になって呻く。

「くうう……うう」

「この軟弱者が！」

語気荒く、林が教鞭を投げ捨てた。

「これでは、たとえ鉄棒に縛りつけて大和魂を叩き込んでも、たいした効き目はなさそうだ。もう、やめた」

その言葉を聞いて、栄子は意識が薄れかけた。これで赦してもらえると、誤解したのだ。

しかしもちろん、これしきの甚振りで林の

嗜虐心が満足するはずもない。

林は、また栄子の喉をつかみ、今度は股間を掬い上げるだけでなく、割れ目の中の穴に中指を突き立てて、立ち上がらせた。

「いやあ……！」

新たに加えられた痛みに、栄子は悲鳴をあげた。

「廊下へ出ろ」

喉をつかんでいた手が肩に掛けられると、栄子はみずから進んで先へ歩いた。

林もすこしは女子生徒たちの目を意識しているのか、あっさりとは股間から手を抜いた。

栄子は、素裸のまま廊下に立たされた。知子のときとは違って、教室を背に正面を向かされた。水を張ったバケツを頭に乗せられたのは同じだが、脚の間にも二つ並べて置かれた。『整列休め』よりもさらに大きく脚を開いていなければならない。

股間の痛みが薄れてきたぶん、恥ずかしさがつのる。

「罰直は午後一時までで赦してやる。その後は生活指導だ」

林は栄子の顔を見ずに、床に置いたバケツに視線を落としている。

最初は訝しく思った栄子だったが、バケツの水が鏡の役を果たしていると気づくと、カアッと全身が火照った。

「しっかり反省するんだぞ」

知子のときは尻を撫でた林だったが、正面を向いた栄子には、割れ目を指でなぞった。

生まれて初めて、しかも続けざまに羞恥の根源を觸られて、栄子はおぞましさに身を震わせ——ることすら封じられているのだった。

さすがに「はい」とは返事ができず、バケツを傾けないためには顔をうつむけることもできず、栄子は正面を見つめたまま唇を噛み締めて、林の指が股間からはなれるのを待つしかなかった。

「ん？ 不貞腐れているのか？」

ぐりっと穴をえぐられて、栄子は反射的に

腰を引いた。水が跳ねて、床に飛び散った。

「そんな生意気な態度でいられるのは、いまのうちだけだぞ」

林は指を抜いて、ふだんの五割増しくらいには腫れあがった乳房で汚れを拭いた。

「午後からは、みっちり生活指導をしてやるからな」

左右の乳首にデコピンを一発ずつ食らわせながら、林は教員室へ引き揚げていった。

林の姿が消えると、栄子は正面を見据えたまま、静かに涙をこぼし始めた。

栄子の背後では、十四人の女子生徒たちが木製地雷を組み立てる音が、いつもと変わらず響いている。しかし、おしゃべりはおろか、ひそひそ声すら聞こえてこない。

完成した地雷を運び出してつぎの材料の持ち込む女子生徒の動きは、いつもに比べてせかせかしている。けっして栄子の裸身には目を向けない。知子以外の十三人の女子生徒たちにとって、栄子は存在しないも同じなのだ

った。

身じろぎもろくにできずに廊下に立たされていると、頭に浮かぶのは母のことだった。ほんとうに刑務所に入れられるのではないかという不安が、日一日とつのがってくる。

母の受難は、そのまま自分の受難だということ、栄子は理解し始めている。

ズル休みは、たしかに悪いことだ。けれど、ここまで厳しく、いや残酷に罰せられるのは、母がスパイ（逮捕されたというだけで、世間はそう決めつける）、つまり非国民の最たる者だからだ。

きっと、今日だけではすまない。母が無実だと証明されるまで、わずかな落ち度を針小棒大にあげつらわれて、体罰と辱めを受けるだろう——と、そこまで悲観的になっている栄子だったが。それでも、まだ楽観的に過ぎるのだとは、思いも及ばなかった。